

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 早津恵美子



学位申請者 成 知炫（ソン ジヒョン）

論文名 現代日本語の補助動詞—「してみる」と「してみせる」の意味・用法の記述的研究—

### 【審査結果】

本論文は、現代日本語の動詞のいわゆるテ形に補助動詞「みる」「みせる」がついた「してみる」「してみせる」の形（「着てみる」「書いてみせる」）について、その使用実態をコーパスを用いて広く調査分析し、意味・用法を明らかにしたものである。考察にあたっては、それぞれの意味・用法が実現する言語的な諸条件（主動詞の語彙的意味のタイプ、文中での形態的な特徴、構文的な特徴、連文における文脈的特徴）を丁寧に考察し、これらを総合的に捉えることによって、広義の言語形式に支えられた意味・用法を取り出すことに成功している。両形式を合わせて考察対象とし、このような方法論によって実証的になされた研究はこれまでになく、本研究はきわめて独創的かつ意欲的な論考である。本研究で得られた知見は、両形式の研究に大きな貢献をなすものである。

審査委員会は、論文審査と最終試験の結果にもとづき、審査委員全員一致で、学位申請者に対して、博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論にいたった。

なお、審査委員会は、早津恵美子を主査とし、学外から新屋映子氏（日本語文法論、桜美林大学教授）、前田直子氏（日本語文法論、学習院大学教授）の二氏、学内の高垣敏博教授・川村大准教授の二氏を副査とする5名で構成された。

### 【論文の概要】

本論文は全4章からなる。第1章で研究の概要がのべられた後、第2章で「してみる」、第3章で「してみせる」について、それぞれ意味・用法が論じられ、第4章で全体がまとめられる。第2章、第3章はいずれも、意味・用法を実現する言語的な条件として、主動詞の語彙的意味の特徴、「してみる」「してみせる」形の形態的な特徴、「してみる」「してみせる」文の構文的な特徴、連文を単位とする文脈的特徴をさぐり、それらに支えられたものとしての文法的な意味および用法を明らかにするという方法論的立場で論じられている。

各章は次のような内容である。（なお以下では、「してみる」「してみせる」をそれぞれV・テミル、V・テミセル、と表記することがある。）

第1章〔本研究の対象と方法〕では、本研究にとって重要な概念である「もくろみ」「意志」「意図」などについて概念規定がなされた上で、本研究が上述した方法論にたつことの理論的背景および意義が述べられ、考察に用いるコーパスの性質の説明がなされる。分析対象とするデータは、「してみる」が1,104例（対象とするコーパスから得られた全収

集例 3,700 例の約 3 割)、「してみせる」が 392 例(同一コーパスからの収集例のすべて)である。なお、同一コーパスの中にみられる V-テミルと V-テミセルの用例数のこの大きな差も、本研究が見出した点である。

第 2 章〔「してみる」の意味・用法について〕では、まず、先行研究を紹介しつつ本論文との関係が述べられ、つづいて、上述の 4 つの観点から詳細に考察することにより V-テミルの意味・用法に「ためし」「弱ためし(発見のきっかけ、体験への憧れ、実際)」「気づき」という 3 種 5 類があることが主張される。

- ・美味しそうだったので食べてみたが、それほどではなかった。(ためし)
- ・買い物から帰って来てみたら、ガスの臭いがしていた。(発見のきっかけ)
- ・一度は高級料理店で上等な料理を食べてみたい!(体験への憧れ)
- ・一曲歌ってみようとしたが、一曲も思いつくことができなかった。(実際)
- ・冬になってみると、北国だという実感がする。(気づき)

これらの意味・用法を支える 4 種類の言語的條件とはそれぞれ次のようなものである。

- ①語彙的な意味の特徴：V-テミルの主動詞の語彙的意味の特徴としては、従来「意志性」が指摘されているが、本研究はそれだけでは不十分だとし、これに加えて動詞に「認識性」すなわち「動作を行った結果や変化の結果を視覚などの感覚で認めるという性質」が備わっていることが重要だとされる。
- ②形態的特徴：V-テミルが文中でとりうる形(終止形であるか非終止形であるか)と主動詞の「意志性」の関わりが重要とされる。例えば、「帰る」のような意志動詞は「帰ってみた。」のような終止形と「帰ってみると」「帰ってみたら」のような非終止形のいずれもとることができるが、「雪がとける」のような無意志動詞は「雪がとけてみた。」のような終止形がとれない、といった点である。
- ③構文的特徴：V-テミル文の主語が有情物であるか非情物であるかが V-テミルの意味に大きく関わるとされる。(ただしこれは、主動詞の「意志性」の問題と重なる。)
- ④文脈的特徴：V-テミル文を含む前後の文脈の構造が考察される。すなわち、V-テミル文の前後に「V-テミル動作へとかりたてる原因」「V-テミル動作を行った後の結果」がどのように現れるかによって 4 つの文脈類型がとりだされ、それぞれの類型が V-テミルの意味・用法に関わっていることが指摘される。たとえば、「家に帰ってみると」は、異なる文脈類型のなかで使われることによって「ためし」になったり、「発見のきっかけ」になったりするといったことが明らかにされる。

そして最後に、3 種 5 類の意味・用法と文脈的諸条件そしてコーパス中の用例における量的分布が表にして示され、全体の関係がまとめられる。

第 3 章〔「してみせる」の意味・用法について〕においても、第 2 章の V-テミルの考察と同様な構成で考察され、V-テミセルの意味・用法に大きく 4 種「表情・身振り、行為の直接提示」「内面、態度の間接提示」「豪語」「称賛」があることが主張される。

- ・「大丈夫?」花子が訊いた。太郎は何も言わずに(花子に)頷いてみせた。花子は安心したように微笑んだ。(表情・身振り、行為の直接提示)
- ・花子は太郎の無関心に我慢できず(太郎の前で)「あなたなんか大嫌い!」とすねてみせた。「ごめん。」と太郎は素直に認めた。(内面、態度の間接提示)

- ・「今度こそ絶対成功してみせる！」（豪語）
- ・北村はあっさりと勝ってみせ、ファンを喜ばせた。（称賛）

意味・用法を支える4種類の言語的条件とはそれぞれ次のようなものである。

- ①動詞の語彙的な意味の特徴：V-テミセルにとっては、主動詞が「可視性」すなわち「動作の始まりや過程が目で見えらるるか否かという性質」を備えていることが重要だとされる。可視動詞（「うなづく」「（顔を）しかめる」）は、V-テミセルの主動詞になってその動作を相手に示すことを表せるが、不可視動詞（「驚く」「勝つ」）はそれができず、V-テミセルの意味においても、動作を相手に示すという意味は表せないという。
- ②形態的特徴：V-テミセルが文中でとっている形が「未実現形」であるか「既実現形」であるかという実現性が条件となる。
- ③構文的特徴：動作を見せる相手が構文的に特定できるか否かが条件となる。例えば、「先生は学生に「壽」という文字をゆっくり書いてみせた。」のように相手が特定できる場合と、「北村選手は200mをあっという間に泳いでみせた。」のように相手が特定できない場合とでは「してみせる」の表す意味が異なることなどである。
- ④文脈的特徴：V-テミセル文の前後に「V-テミセル動作へとかりたてる原因」「V-テミセル動作を行った後の結果」がどのように現れるかによって、V-テミセルのときと同じく4つの文脈類型がとりだされ、それぞれの類型がV-テミセルの意味・用法に関わっていることが指摘される。また、V-テミセル文については、先行する文の種類（叙述文、依頼・命令文、表出文）との関わりも条件として考えられている。

そして最後に、4種の意味・用法と文脈的諸条件そしてコーパス中の用例における量的分布が表にして示され、全体の関係がまとめられている。

第4章【結論】では、2章・3章での主張を全体としてまとめるとともに、本論文の研究史的な位置づけも試みられており、今後の研究への課題が述べられている。

#### 【講評】

本論文は、現代日本語の「してみる」と「してみせる」とを、もくろみ性という共通の性質をもつものと捉えて両者を包括的に扱い、同一の方法論によって分析することでそれぞれの意味・用法を解明しようとしたものである。「してみる」と「してみせる」についてはこれまでも様々な研究がなされているが、ほとんどが両者を別々に論じるものであった。また、事例の調査にもとづく論考は少なく、必ずしも日本語の実態を捉えているとはいえないものが多い。本論文は、コーパスにもとづいた調査分析を行うことによって両者の使用実態を帰納的に明らかにしたはじめての研究であり、研究対象の面でも方法論の面でも、きわめて独創的な論考である。V-テミル・V-テミセルの研究に大きな成果を付け加えるものとなっているだけでなく、本論文で用いられている方法論は、ほかの補助動詞研究とくにV-テオク、V-テアル、V-テヤルなどの研究に資するところが大きいと思われる。

本論文の内容について、各審査委員から様々な面から評価がなされた。高く評価できるのは次のような点にまとめられる。

- (1) V-テミルとV-テミセルの双方をともに扱い、一定のコーパスからの事例をもと

にそれぞれの形式の意味・用法が論じられるという研究はこれまでになく、意欲的独創的な労作である。

(2) 先行研究が丁寧によみこまれ、従来の研究の流れや成果が正確に捉えられている。その中から問題点を見出し、解決のための方法論を模索しつつ本論文の立場を定め、それにもとづいて着実に研究を進めることで、V-テミル・V-テミセルの研究を発展させている。

(3) 語彙面、形態面、構文面そして文脈面の特徴を丁寧に考察することで、言語の形式と意味、また、その質的な面と量的な面がうまく整合された論文となっている。

(4) V-テミル・V-テミセルを軸とした連文をひとつの言語単位と捉え、それをもとに「文脈の種類」を見出すという方法は、笠松(1989, 1991)などに負うものであるが、コーパス中の用例全体についてこの観点から分析して文脈種類をたて、各種類の量的分布を調査した研究は本論文がはじめてである。情報構造を捉えた研究だともいえる、文脈種類とV-テミル・V-テミセルの意味・用法との関係が顕著に伺え、説明も概ね説得的である。

(5) V-テミルとV-テミセルは、従来の研究において、「もくろみ」性を表すものとしていわば対になるものとみなされることが多かった。本論文もそのような把握から出発している。しかし、方法論として意識的に両者を同一の観点から考察したことによって(とくに、両者の「文脈の種類」を同じ枠組みで捉えて詳しく観察することにより)、V-テミセルには実は「もくろみ」性が希薄あるいは含まれていないのではないかと、あるいは、両者に「もくろみ」性を認めるとしてもそれは異なるものなのではないか、ということが浮かびあがってきている。本論文は「それではV-テミセルの本質は何か」というところまでは考察し得ていないが、「もくろみ」性について改めて考えられる刺激的な論考である。

(6) 母語ではない日本語と粘り強く真摯に向き合い、必死に考え抜いたということがあちらこちらにうかがえる論文である。必ずしも器用とはいえない論じ方ではあるが、そのような懸命な取り組みによって見えてきたところが多く、従来の研究では気づかれていなかったさまざまな興味深い事実が明らかにされている。

個々の用例について興味深い指摘がなされている箇所が多くあるほか、言語事実における「原因」とは何か、「原因」と「結果」とには通じる面があるのではないかと、いった大きな問題に気づかせる用例の提示もある。ひとつひとつの言語事実と格闘したからこそその成果であり、その点も高く評価できる。

以上の諸点が高く評価された一方で、各委員からいくつかの疑問点や再考すべき点が指摘された。主たる点は次のようなものである。

(1) 本論文は、V-テミル、V-テミセルの「意味・用法」を明らかにしようとする論考である。ある文法形式の「(文法的な)意味」と「用法」とを截然と区別するのは必ずしも容易ではないが、「意味」と「用法」、さらには「表現効果」も含め、これらのレベルの違いをもう少し意識するとよかったのではないかと。また、V-テミル・V-テミセルそのものの文法的な意味(基本的)と、それがあある特定の形式や構文において発揮する

文法的な意味（派生的）とが同一に並べられているところがある。こういったことも原因して、「意味・用法」の分類が恣意的に感じられるところがあって惜しまれる。分析のレベルの違いの重視や基準の明確化が望まれる。

(2) 本研究によって見出された意味・用法に付されたラベルの中には、内実がややわかりにくいものがある（V-テミルについての「弱ためし」「実際」、V-テミセルについての「豪語」「称賛」など）。論考の独創性の反映ではあろうが、上の（1）の問題と関係している面もあり、今後考え直していく必要がある。

(3) コーパスから得られた実例すべてを丁寧に読みこんでいく姿勢は好ましいものではあるが、ときに個別の実例の解釈に踏み込みすぎて実例からの一般化がうまくなされず、全体の論理がややつかみにくくなっているところがある。

### 【総合的な判断】

以上述べたように、本論文は、現代日本語の「してみる」「してみせる」について両者を包括的にかつ深く扱った独創的・意欲的な研究である。不十分な点もなくはないが、当該分野の研究の発展に資するところの多い研究であることは審査委員全員のみとめるところである。各委員からの疑問や指摘も、本論文の価値をみとめたうえで、今後の発展に向けての意見という性質が強い。最終試験においては、論文のいくつかの不備について審査委員から指摘しそれに対する成氏の考えをたずねた。そのなかで、成氏が本論文を提出した後も自ら考察を続けていくつかの不備については既に気づき、それを補うべき方向を模索しはじめていることもうかがえた。氏が十分にその力を備えていることも確かめられ、本論文をもとにさらなる発展が期待できるものと思われる。

学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査委員全員一致で、この研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。